

武蔵野日曜聖書講筵

神はわが避所また力なり

――詩篇第46篇――

1995年10月22日

小池辰雄

神はわが力 第46篇「信仰の凱歌」 神交 キリストはわが避所また力なり 無即無限無量
キリストの中に身入 霊体を賜って往生

【詩篇46】（私訳）

楽長に指揮をとらせコラの子らにアラモートウ（高音）調で歌わせた歌

1 神は我らの^{たすけ}拠所また力、

なやみの時に現れる強き助けぞ。

2 されば我らは怖れない、地は変り、

山々は海の最中に揺ぎ落つとも。

3 その大水轟きて激らば激れ。

その漲りにより、山々は震わば震え。

4 河ありてその諸流神の都を、

至高者の聖き住居を喜ばす。

5 神その中に在し給えば、

そは小揺ぎもせず。

晨近づけば神これを助け給う。

6 民らは騒ぎ、国々は動いた。

神その声を出だすや、地は崩れた。

7 万軍の主は我らと共にある、

ヤコブの神は我らの高き巖である。

8 来りて見よ！ 実存主の聖業を。

彼は地に驚きのみ業をなした。

9 彼は戦争を止めた、地の極にまで。

弓をうち砕き、槍をへし折り、

車營を火で焼き棄てた。

10 「汝ら鎮まれ！ 我れの神たるを知れ！

我は国々に崇められ、全地に崇められん。」



11 万軍の主は我らと共にある、
ヤコブの神は我らの高き巖である。

● 神はわが力

詩篇46篇というのはマルティン・ルターの讃美歌と言われている。「詩篇」というのはもと「讃美歌」という意味です。ルター自身が非常に好きだった。今、皆さんが歌われた「神はわが力」は彼自身が作曲し作詩したルターの讃美歌です。彼は有名な讃美歌を七つほど書きましたけれども、そのうちの一番有名な歌です。

私はかつて雑誌に詩篇46篇を書いたことがあります。それによってお話をしたいと思います。初めに詩篇の私訳を読ませていただきます。

1 神は我らの拠所また力、

なやみの時に現れる強き助けぞ。

2 されば我らは怖れない、地は変り、

山々は海の最中に揺ぎ落つとも。

3 その大水轟きて激らば激れ。

「激らば激れ」という言い方は、原語で二重の言い方になっているのでそのまま訳したわけ
です。

その漲りにより、山々は震わば震え。

4 河ありてその諸流神の都を、

至高者の聖き住居を喜ばす。

5 神その中に在し給えば、

そは小揺ぎもせず。

晨近づけば神これを助け給う。

6 民らは騒ぎ、国々は動いた。

神その声を出だすや、地は崩れた。

7 万軍の主は我らと共にある、

ヤコブの神は我らの高き巖である。

8 来りて見よ！ 実存主の聖業を。

彼は地に驚きのみ業をなした。

9 彼は戦争を止めた、地の極にまで。

弓をうち砕き、槍をへし折り、

車営を火で焼き棄てたもう。

「車営」とは戦車の陣です。

10 「汝ら鎮まれ！



而して、我れの神たるを知れ！

我は国々に崇められ、全地に崇められよう。」

「万軍の主は我々と共にある、

ヤコブの神は我らの高き巖である。」

これが詩篇46篇の私訳です。「信仰の凱歌」と私は題をつけた。信仰の勝利の歌というこ
とです。

●第46篇「信仰の凱歌」

第46篇「信仰の凱歌」（小池辰雄著作集第4巻『詩篇珠玉集』1980年刊）という私の文章
を読ませていただきます。

「詩篇全百五十篇の中から十歌を選ぶとも、五歌を択るともその中にこの詩篇を数えな
いでは居れない。否、最後に残る一篇であるかも知れない。ルターが宗教改革の軍歌
としてこの歌を謳いつつ真理の戦を進めた心根を想う。万軍のエホバはルターにとっ
ては同時にイエス・キリストであった。この雄篇から彼はいかにしばしば深い慰めと
力を与えられたことが。」

「さあ、フィリップ、また詩篇第四十六を謳おうじゃないか」

と信友メランヒトンをさそって合唱すれば、うなだれた魂は奮い起たされるのであつ
た。それが彼自身この詩篇に拠って作詩作曲したあの有名な

“Ein feste Burg ist unser Gott” “われらの神は堅き城なり”

「神はわが^{やへい}櫓」（讚美歌269）であった。その他に我々が親しんでいる讚美歌「神はわが力、
わが高き櫓」（讚美歌286）も正にこの詩篇に準じて詠われたアイザック・ワッツの歌で
ある。

どの詩篇も決定的に年代と作者を断定することができない。しかしどの詩篇もイス
ラエルという具体的民族の苦難の歴史の中から響き出でた声である。この詩が何か大
きな歴史的事件の感動の中に作られたものであることは、全詩の現実的迫力と第1、
第6、第8、第10の諸節から推測される。なお本詩の雄大な信仰内容とその雄勁な表
現は、本詩がイザヤ的な預言者魂の作であることを推測させる。

例えば第1節の「神は我らの拠所また力」はイザヤ12・2「神はわが救、われ依り
頼みて懼るるところなし、主エホバはわが力、わが歌なり」と相応え、第2、第3節
の天変地異にも動じない信仰は、イザヤ17・12、13の天地の鳴動に敵の審判を見てい
る信仰の勝利感と相通ずるものがあり、第4節、第5節の「神の都」の消息は、イザ
ヤ書第60章の10節から22節の消息と相応える。第7、第11節の「インマヌエル」のお
とづれば、イザヤ7・14、8・8、10の「インマヌエル」即ち「神我らと共に」を連
想させる。第10節の「汝ら鎮まれ！ 我れの神たるを知れ！」はイザヤ7・4「汝謹



みて静かなれ、30・15「汝ら立ち歸りて静かにせば救を得、平穩にして依頼まば力を得べし」と相照応する。

詩の形態が祭礼用にふさわしいという学者もあるが、私はこの迫力あるリズムを見ると原作はイザヤかイザヤの弟子に相違ないと思う。然りとすれば、かの紀元前701年のエルサレムの奇蹟的な救が歴史的背景となっていると見る伝統的な説がやはり最も妥当と思われる。

これをルターが自分の讚美歌に作り変えたわけです。もとはイザヤ書から来ている。ルターの信仰は非常にイザヤ書に養われています。

東方の猛鷲アッシリヤが西方の巨鰐エジプトと雌雄を争わんとした時、アッシリヤ王センナケリブの大軍がエルサレムを攻囲したが、預言者イザヤの神信頼とヒゼキヤ王の熱祷を嘉し給うたエホバは、アッシリヤの陣営に天軍を遣り、一夜にしてこれに殲滅的打撃を与え給うた(列王下18・19、イザヤ36・37章参照)。このような史的背景はこの詩に最も相応しい。……

そういう歴史的な非常に素晴らしい背景のある詩篇です。ルターも信仰の戦いの中で、この詩篇46篇はルターの詩篇と言われるくらいに親しんだわけです。

●神交

「神は我らの避所また力なり」

というのは、我々にとっては「神」は「キリスト」です。

「キリストは我らの避所また力なり」

ということですが。イエス・キリストはそういう方です。信仰というのは悪魔や悪との戦いのそういう抛り所を持っているわけです。

あるグループは自分の側の祈りということを強調して、こちら側の力強い祈りが非常に問題になっている。ところが、私はそうではない。

「キリストの力に圧倒される。こちら側の信仰の力ではない。信仰なんか問題にするな」

という角度です。こちらは無力でいい。だから、私は

「無」

ということを使う。こちら側は無力で、キリストの力、光、愛に圧倒される。それは私の信仰の事実だから仕方がない。

「圧倒される」

という言い方が非常におもしろい。太陽の光に圧倒される。電灯やローソクの光や、どんな光をもってきたって、太陽の光にはかなわない。そういう、

「霊的な天来のキリストの光、力、愛、生命」



これに圧倒されて立ち上がる。

私は「自分の信仰」なんか問題にしてない。圧倒されて、力が来て、ありがたくてしょうがない。そういうのが私の信仰ならざる

「神交」
[しんこう]

です。信じ仰ぐのではない。神・キリストとの交わりの世界です。魂が捕まえられて、そして動かされる。「信仰」は正に「神交」と書きたい。

「自分の信仰」

なんか問題にしてない。自分は「ゼロ」だ。そうすると、「無限大な無限力」がやってくる。それだけのなしです。これは私の自分の事実だから仕方がない。キリストの前に平伏すと、そういう力がくるから、ありがたくてしょうがない。

「しょうがない」

と言うよりか仕方がない。

「どうも私は信仰が足りないので、もう少し信仰をあつくしなければ」

なんて、何を言っているかと私は言いたい。そんなことをしたら、くたびれてしまう。ところが、無力の世界が無限力の世界なんです。

「無即無限無量」

というわけです。

自分の信仰だとか行為だとか、そんなものを問題にしたって始まらない。皆さんもそうでしょ、楽しくてありがたくてしょうがない。本当の信仰の世界は楽しい喜びの世界です。やせがまんなんかしていない。

「歌いつつ歩まん」（聖歌498番）という歌がある。人生は本当は讃美歌なんだ。どんなことがあっても神讃美、キリスト讃美です。運命環境がどうなっても、神讃美です。これが本当の棄身の世界です。皆さんも、することが為すことが楽しくてしょうがない。

「難しいことでも何でも結局は喜びであり楽しみである」
というのが本ものです。

●キリストはわが避所また力なり

何がありまして、

「神は、キリストはわが避所おけいじうまた力なり」

ということです。何でもいいから、キリストの所にやってくる。私は寝るときに、黙って腹の底から、

「主さま！……お休みなさい。あなたの懷の中に寝ます」

と祈る。霊的な現実というものはそういうものです。そうすると――ヒルティの『眠られぬ夜のために』という本があるけれども――眠られないという心配はいらない。



私は新約聖書の小池訳というのを作ろうかな。どうも現行訳はまだるつくてしようがないから。ギリシヤ語で未来形があつたつて、現在で訳して構わない。未来形を「…であろう」なんて訳したらダメなんだ。信仰の世界は「…であろう」なんていう世界ではないから。「…である」という世界です。未来も過去も全部本当の現在にしてしまう。永遠の現在ということです。

ルターさんは聖書をドイツ語に訳したけれども、やはり力強い。非常に詩的です。ルターのドイツ語は非常に詩人的です。散文的ではない。だから、ドイツ語の聖書は非常にいい。

「キリストはわが避所また力なり」

とは正にその通りです。何でもいから、キリストの所に行けばいい。そうすると、それは避所で、どんなサタンの力もキリストにはかなわない。そして、本当に力であり、生命であり、喜びである。我々が、

「主さまー」

と一言いうと、その一言は無量の内容を持っている。だから、その次は、

「ありがとうございます。感謝いたします」

の他に言葉がない。一番大事な姿は平伏しなんです。昂然こうぜんとして言っているのではない。平伏して言っている。そうすると、その平伏しは本当の立ち上がりになる。

普通のクリスチャンは、

「信仰、信仰」

と言っている。私も、無教会の内村鑑三、藤井武先生方から「信仰、信仰」と聞かされていた。

「行為ではない。信仰が大事だ」

と。そして、「自分の信仰」を問題にしている。くたびれてしまう。それはやはり一種の観念だったね。けれども、本当はちよつと違うんだ。

また、ある人たちは一生懸命で

「聖霊、聖霊」

と言っている。けれども、十字架の土台のない聖霊はダメです。

●無即無限無量

キリストは、「我は火を投ぜんために来たれり」と仰つた。「火」とは聖霊のことです。

「49 我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50 されど我には受くべきバプテスマあり。」

「受くべきバプテスマ」とは十字架のことです。

その成し遂げらるるまでは思いせま遍ること如何許いかばかりぞや。」(ルカ12・49～50)

十字架にかかつて贖罪のわざをとげたら、そうしたら今度は「火」という聖霊を降だす。



「自分が十字架にかかって、それから復活して、そして聖霊を与える。十字架が土台でこの火なる聖霊がくる。そういう段取りになっているんだぞ」

ということ。このルカ伝12章49〜50節は非常に大事なところですよ。ルカ伝で一番大事なところと言ってもいい。

「三日目に甦よみがえるぞ」

とちゃんともう予言しておられた。十字架にかかりっぱなしではない。「甦よみがえる」とは、

「霊的な生命体として現れる」

ということです。「また生き返る」という意味ではない。その消息をパウロがローマ書8章、9章で徹底的に語っている。

「無即無限無量」

ということ。しかも、その無は禪宗のような悟りの無ではない。キリストから賜りたる無です。

「そのままでもいいよ。そのままのお前の存在のどん底に無をやる」

ということです。我なき我となるわけです。キリストの力が、生命が、光が、愛が、これが我々の中に動きだす。智慧もそうです。だから、何をやっても行きつまらない。

聖書は意味ではない。霊的な力ですから。いわゆる言葉の文字の意味をいくら考えたってダメです。

「これはどういう意味だ」

なんてよく言うが、どういう意味ではない。文字は暗号なんだから、

「暗号はその奥に何を秘めているか」

ということですよ。

キリストは死人をも甦よみがえらせた。キリストの力というのは凄いんだから。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

というのがパウロの現実だった。我々もそうでなければダメなんだ。キリストと一つになっている。キリストと一如の境地です。「信仰」ではない。一如的現実なんだ。現うつの世界、霊的な現実の世界です。

「私の信仰は……」

なんていう言い方をしているうちは、いつまでたつてもダメなんだ。「信仰」がサムシングになってしまっている。こちら側の信仰が問題になっている。そうではない。キリストに圧倒されるだけです。

日本は精神的に大変だな、こんなことでは。経済大国なんて言って、とんでもない。問題は経済のことばかり。日本人が今、精神的に一番ダメなのではないかな。韓国の方がもう少し霊的ではないですか。あなた方は日本の本当のキリストの奴婢とならなければ。



●キリストの中に身入

「⁵¹われ地に平和を与えんために来ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反^{かえ}つて分争^{ぶんそう}なり。⁵²今より後、一家に五人あらば三人は二人に、二人は三人に分かれ争わん。⁵³父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、^{しゅうとめ}姑は嫁に、嫁は姑に分かれ争わん」(ルカ12・51～53)

「一家の中でも争いが起きるぞ」と、キリストは大胆に語っておられる。

「われ地に平和を与えんために来ると思うか。冗談じゃないぞ。平和ではないんだ、戦いだ」

と。これが深い愛のキリストの言葉なんです。キリストの言葉はやはり烈しい。普通のいわゆる教育家にはこんな言葉は出てこない。次元の違った絶対次元からきているところの真理というのは凄い。

「これは凄い言葉だな、これは楽しいな」

と、この凄い言葉が楽しくなったら本ものです。そういう読み方を我々はしていかななくては。読むのではなくて、食らっていく。

我々は一回毎に常に新たに進んでいく。決して繰り返してはいかない。私は告白しながら——これはお説教ではない——あなた方は聞きながら、

「楽しくてしょうがない、力がきてしょうがない」

という集会です。だから、集会は来ざるを得ないと、万難を排して皆さんはやってくる。

いわゆる文学書もいわゆる哲学書も聖書一卷にはかなわない。本当の哲学も本当の文学も、これは聖書を根拠としている。ダンテの『神曲』なんかを読むと、全くそうだ。

「キリストはわが避所また力なり」

と、こんなありがたいことはない。

「私はキリストを信じていません、避所とし力としています」

と。私は「信ずる」という言葉は嫌いだ。「信仰」ではなく、「体受」する、身体で受けとることです。こんな言葉はないけれども、「身入」する。全存在的に、身ごとキリストの中に入っていく。

何でもいいから、キリストの所へ行けばいい。キリストは絶対に無条件に入れてくださるから。

「でも、お前はこうだ」

なんて絶対に仰らない。無条件に入れてくださる。ただ平伏して、

「ありがとうございます。み力にあずかります。あなたを生命とします」

と言うだけです。正に、

「キリストはわが避所また力なり」

です。これは「神は」ではない、「キリストは」です。



●霊体を賜って往生

私は昔、「終末的」ということをよく言った。世の終末、世の終りということ。世界は、今に人類がダメになってしまつて、終末になって滅びてしまう。そして最後に「新天新地」がくる。新しい天と新しい地がくる。地球の歴史の終りです。これは黙示録の終りの方を読むと、そういう気持ちで書いてある。黙示録21章、22章です。

聖書より楽しい本はない。毎日、聖書を読まないではいられなくなつてくださいます。聖書一卷は大変な本だ。やはり神さまがつくった本だ。

「万巻の書も聖書一卷にはかなわない」

とゲーテが言った。さすがはゲーテだ。

この世の終りがきて、あと今度は「新天新地」がやってくる。我々の希望は、我々一人ひとりがその新天新地の人になること。キリストから永遠の生命をいただいていますから、我々は死なないですよ。地上の生涯が終わつたら、次の世界に往生する。往きて生きる。「死」という言葉は私は嫌いだ。私は死にません、往生する。この肉体なんかどうなったつていい。次の世界に、霊体として、霊体を賜って往生する。

これはパウロが言っている。

「44 血氣の体にて播かれ、靈の体に甦えらせられん。血氣の体ある如く、また

靈の体あり。

「血氣の体」というのは我々が今持っているこの身体のことです。

……52 終のラッパの鳴らん時みな忽ち瞬間に化せん。ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦えり、我らは化するなり。53 そは此の朽つる者は朽ちぬものを著

54 この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり。此の朽つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るとき『死は勝に吞まれたり』と

録されたる言は成就すべし。55 『死よ、なんじの勝は何処にかある。死よ、

なんじの刺は何処にかある』56 死の刺は罪なり、罪の力は律法なり。57 されど

感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリストによりて勝を与えたもう。

58 然れば我が愛する兄弟よ、確くして揺くことなく、常に勵みて主の事を務

めよ、汝等その労の、主にありて空しからぬを知らばなり。」(コリント前15・

44 : 58)

とある。聖書は楽しい、力がきてしょうがない本です。聖書を楽しんで読まなければ。ご飯は朝昼晩、食べるけれども、聖書を必ず読まなかつたら魂が飢えてしまう。魂の渇きがあつたら、すぐ聖書を読む。聖書を食らう。他のどんな人間の書いたものもダメですよ、聖書一卷にはかなわない。特に新約聖書は素晴らしい。それから旧約では預言書。アモス、ホセア、ミカ、イザヤ、エレミヤなどです。

